

空



2014 · 6 · 7

SORA 55号

自在

柴田佐知子

利き腕は荒鷹のため空けておく

風花やよろこぶやうに湯の沸きて

万骨をそのままに胡沙来りけり

川舟のどれも急がず桃の花

雛壇に加へたき子が雛の前

老人は島に残りて春まつり

余所者を拒む背ばかり鶏合せ

子を持たぬこの世は自在春シヨール

慶弔のはじめこの度はと朧

親もとで親ごと老いて桃さくら

— 『俳壇』 5月号より —

帰りには止まつてゐたる作り滝

恋すでに思ひ出として桐の花

正面に貌のふくらむ金魚かな

井戸蓋に露の束あり誰も居ず

濁り鮒鱈を収めて田を移る

働きし足に水打ち夏旺ん

羽抜鶏総身に赫のまはりたる

朧 高倉 和子

尖りたる波が光れる絵踏かな

蛇穴を出て国境を過ぎにけり

石鱗玉どちらにしても終る恋

春の山怪しき石も祀られで

さくらさくら呼び戻したき人ありて

母のもの少し焼きぬて朧かな

ふらここを漕ぎて昔に戻りたし

春眠しこの世を捨ててしまふごと

麦藁帽 中田みなみ

遙か来て真砂女の海の卯浪かな

譲られし席にまどろみ聖五月

麦藁帽日照雨が音をたてにけり

ぎりぎりの穴の寸法蛇出づる

岬まで夜雲明るき麦の秋

再びは逢へぬ船ゆく虹の國

カーネーション母の日知らぬ母に買ふ

もうひとりの己れに鳴けり仏法僧

逢瀬道

荒井千佐代

小石

服部早苗

病人の怒り深まる濃山吹

一汁に散らす春菜や朝ぼらけ

鍵盤の黄ばみ沈みも麦の秋

うつし世に小石を噛んで残る雪

簾越し灘の暮れゆく登四郎忌

うすらひを卑弥呼が鏡かざすごと

棘ある木とげ尖らせて梅雨に入る

夜の浅蜷やまことばの泡ひとつ

潮風の居間に届きて水羊羹

こぎ捨てのふらここ映す水たまり

麦熟れ星煙出しより火の粉出て

まだ刻む夫の時計鳥雲に

浅草寺

ハイヒール跨いでゆきし蛇の衣

浅草や新旧二塔霞みつつ

夏落葉逢瀬道また獣道

海舟の扁額に春惜しみけり

夕ざくら 柴田志津子

本家 だいじみどり

世話役のやつと決りし梅の村

豆の莢もやしのひげや亀の声

野の果の白き仏塔風光る

美容室より遠足の列を見る

雄鶏の塩辛ごゑや地虫出づ

夕食の頃あらはるる守宮かな

裁断の鋏を入るる花明り

四月馬鹿睡毛へ合せ鏡など

堀割の水たつぷりと夏隣

春の雨豊後の牛を濡らしけり

葉桜や子捕ろ子捕ろと鬼子母神

阿蘇山は霞の中に豊肥線

ぱんと音たててすかんぽ折られけり

五月晴本家の馬に会ひに行く

もう帰ろ天神さまの夕ざくら

それぞれの窓際の椅子花の旅

豆の花
野上
杏

鯉の水尾広がる五月来たりけり

揚雲雀シャツの袖口折り返す

南北を開け放ちたる薄暑かな

藤房に飛び込む虻のうなり声

手びさしに待つ真昼間の牡丹園

初蛙跳び出しざまに転がれり

海見えぬ風の匂ひや青き踏む

これよりは楽しき齡を豆の花



福岡 矢野 百合子

風糸の手のひら走る素早さよ

ふるさとの山みなまろし揚雲雀

良き名持つ苗札しかと立てにけり

覗かれてみな立ち上がる踊子草

竹の子の逃げ出すやうに生えにけり

糸田 宮井 知英

囀や泡のやうな赤ちやん語

甕棺に榊の残る朧かな

春宵や母のゐさうな古鏡

橘の花や密かに反抗期

逃げさうな夢なら花と散らすのみ

福岡 樋口 みのぶ

霊廟に造花の並ぶ寒さかな

水仙の陰のすいせん切りにけり

夜桜や身の潔白は自刃にて

余生ふと足りぬと思ふ桜かな

残り鴨湖の真中に影落とし

粕屋 秋 千晴

ペンギンと同じ高さの夏帽子

土用あい貌を潰して虎眠る

糸蜻蛉葉を揺らさずに止まりたる

翅広げすぎて蠟螂納まらず

遠足の弁当に鳶低く来る

福岡 吉村 撰 護

長崎 鳳 蛭 華

啓蟄や要介護より抜け出せず

芽柳のあやふやな影踏みにけり

爪切りの指に馴染まぬ忘れ霜

二の丸の海に迫り出す桜かな

菜種梅雨たたくガラスの送迎車

黄たんぽぽ一茶は犬を飼つて居た

鳥帰る天の一隅切り開き

藤棚の暗がりに棲む水の精

青嵐弱足二本に杖を足す

亡き人に謝辞つぶやけば百千鳥

兵庫 戸 栗 末 廣

新宮 井浦美 佐子

変電所のまはりたんぽぽ花ざかり

有線のマイクで誘ふ花まつり

あひる見にゆくポケットに雛あられ

花御堂なんだかんだと葺きあがる

牡丹ざくらまふた二重になつてゐし

霧吹きをして仕上がりぬ花御堂

じやがいもが好きじやがたらの花が好き

捨つる気の帯の手ざはり鳥雲に

雨を呼ぶ水輪をつくり水馬

ゆく春や畳紙に残る母の文字

福岡 あさなが捷

風鈴の一斉に鳴る陶器市
神いまだ人を殺めて夏の月
海底の朽ちし船よけ海月かな
また逢ふという気もなくして心太
変心の傷は残さず酔芙蓉

大阪 田岡 千章

閃きは記さねば忘る猫柳
露の臺子孝行など知りませぬ
父の忌の近し青鰻にて一献
植木市天守廬に旗靡く
ここよりは神域の径蝮草

福岡 山内 碧

花屑を載せし列車の動きだす
妹の手をひいて野に遊びけり
すかんぽやおとうと兄の真似ばかり
脇息へ棋士の重みや青嵐
母の日やエプロンはづさずに過ぐる

千葉 原 友子

搾乳の指のドレミファ花菜風
青芝やまだ火を知らぬピザの窯
ずぶ濡れの踊子草に日が昇る
鯉のぼり空に奔流生まれけり
激つ瀬の石に丸みや更衣

粕屋 吉田 葎

屋上の空広々と卒業す

鳩の喉まるく膨らむ雨水かな

花曇鳩はつがひで戻り来る

大木を見上ぐるばかり捕虫網

甲虫戦ふ前に飛んでゆく

須恵 苑 実 耶

横顔を見つむるばかりさくらの夜

人柄の丸くなりたる花衣

花吹雪くるくる回る女の子

散る花の真つ只中へ乳母車

苗札を抜きて名前を確かむる

東京 今井 春生

産声の廊下に聞こゆ初燕

全きは赤子の笑みや若楓

入園児まつすぐ戻る母の胸

一斉に立ち上がりたる春野かな

重力の無きがごとくに花の中

福岡 田代 貞枝

春北風や断崖に建つ大伽藍

天空の寺の回廊夏立ちぬ

花まつり行き交ふ僧に黙礼す

涅槃図の蘊蓄を聞く正座して

山道の空狭くする山櫻